

卑弥呼（ヒミコ）

卑弥呼は何十人何百人といった

（文中太字は引用者による）

．．．．邪馬台国の女王・卑弥呼を特定の個人にあてはめるには無理がある。卑弥呼は北九州にも、大和にも、またその他の地方にもいていいのである。**卑弥呼は、特定の個人を指す固有名詞ではなく、「ヒメミコ」を意味する普通名詞**なのである。ヒメは女性、ミコは巫女である。『魏志倭人伝』では、卑弥呼は鬼道に仕え、よく衆をまどわし、国が乱れても彼女が立つと、すぐ治まると書いてある。ここでいう鬼道とは、中国から見た鬼道である。中国と日本では、当然ながら神は同じではない。中華思想で考えれば、野蛮国・日本の民が信仰している神など、しょせん死者の靈魂を中心とする「鬼道」にしか見えなかったのであろう。おそらく、この卑弥呼は神に仕えていた巫女で、信仰的に国を治めていた。卑弥呼は神に仕え、神憑かみがかかりをして神の意志を伝え、一般民衆を指導していた。日本の古代社会は母系社会であった。そこではシャーマニズム信仰が共同体社会を支配し、かならず神に仕える女王（ヒメミコ）がいた。だから、当時の日本に無数にあったと考えられる村落国家には、これまた同じく無数のヒメミコがいたはずである。おそらく彼女は、村落を治める主婦たちの代表者で、ふだんは勤勉なおかみさんだが、政事や農事の必要に応じてヒステリー現象を起こし、神憑りし、神の託宣を告げたのであろう。こんなときの彼女は、ひきつった、こわい表情であったはずで、どう見ても美女だったとは思われない。このような卑弥呼の治める村落国家の連合体の一つが邪馬台国で、その最高の支配者の一人を女王・卑弥呼と呼んだのではなかろうか。

<樋口清之「逆・日本史 3」(<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/28.pdf>) より>

<この文書は、「生駒の神話」（下記 URL をクリック）に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>